

Si-report

Socio-Intelligence report

2022
vol.17
SENSHU UNIVERSITY

2022年4月

専修大学のビジョンと現状

建学の精神と21世紀ビジョン

「社会知性の開発」

21st. century vision SOCIO-INTELLIGENCE

社会知性(Socio-Intelligence)とは

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力である。

専修大学は、1880(明治13)年、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。4人の創立者は、帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立します。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。以後、本学は関東大震災や戦禍などによって極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世

紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」を21世紀ビジョンに据えました。

今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題は山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であると同時に、「専修大学が創り育てる知」でもあります。

Siとは…

「社会知性:Socio-Intelligence」の頭文字[S][I]と「SENSHU Intelligence」の頭文字[S][I]を表現しています。本誌は、専修大学のビジョンと現状をレポートしていきます。

シンボルマーク&カラー

Sの字は専修大学と21世紀ビジョン「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」の「S」を意味します。ブルーの曲線は大海原を、緑の球体は地球を表し、本学で「社会知性」を育んだ人材が、世界に羽ばたき、活躍するさまを表現しています。



専修大学マスコット「センディ」

獅子の姿に鳳の羽を配した本学のマスコットは、若者たちに無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいてほしいという思いが込められています。



President
interview

—
専修大学学長
インタビュー

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

これからの専修大学が目指す方向

～ 新たな時代を担う人材育成 ～

専修大学がSDGsに取り組むことにした経緯を教えてください。

SDGsに早くから関心のあった本学教員から、その普及活動のための外部コンペに挑戦したいとの相談を受けたことが、私がSDGsという言葉に触れた最初のきっかけでした。その後、SDGsについて詳しく調べたところ、構成している17の目標は、専修大学の21世紀ビジョン「社会知性の開発」(The Development of Socio-Intelligence)と非常に重なり合うことに気が付きました。大学で得た知識や技能を社会の諸問題の解決に役立てるというマインドを陶冶することが「社会知性の開発」の考え方ですが、専修大学がSDGsの取り組みにコミットすることは、「社会知性の開発」の一環だと考えました。それには「見える化」が必要だと考え、2019年度、全専任教員に対してアンケート調査を実施したところ、実に100件近くの取り組みが確認できました。

そこで、創立140周年を迎えた2020年を機に、今後10年間の「社会知性の開発」の中心はSDGsの達成に貢献することだと定め、大学として組織的かつ具体的に取り組むこととしました。

そこで、専修大学自体のSDGsの取り組みの母体となる組織を作りました。それが「専修大学持続可能な開発目標(SDGs)推進委員会(以下「SDGs推進委員会」という。)」です。全学部長、法科大学院長およびこの分野に知見のある教員などをメンバーにして、全学の司令塔になる存在としました。なお、現在は、法人組織の幹部もメンバーに加え、法人・教学一体となった組織体制となっています。

次に具体的に取り組んだこととはどのようなことでしたか？

専修大学では、SDGsについての活動の幅を広げるべく複数のフェーズを設定し、並行的、同時的に取り組んでいます。

第1フェーズは、教員レベルと位置付け、前述のとおり教員が行っているSDGsに関連する活動の可視化をしました。また、第2フェーズは、学生レベルと位置付け、学生のSDGsに関する取り組みの見える化として「専修大学SDGsチャレンジプログラム」を2020年に立ち上げました。同プログラムは、応募時点において実践段階にない「アイデア」を募集する部門と、具体的な実践がある「アクション」を募集する部門を設けた学内コンペです。コロナ禍で開催はオンラインでしたが、非常に質の高いプログラムとなりました。

第3フェーズは、専修大学としてのSDGsの取り組みを位置付けました。その一例として、文部科学省、経済産業省、環境省のタイアップで呼びかけられた「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション」への参加が挙げられます。コアリションには5つのワーキンググループが設けられ、本学は、「地域ゼロカーボ



未来に向けた取り組みと人材育成

～ SDGsに関する諸活動を整理し、社会に発信 ～

ンワーキンググループ」と「人材育成ワーキンググループ」に参加しています。

現在、SDGs推進委員会の下には、コアリションの活動に対応することや専修大学としてのSDGs達成に向けた、4つのワーキンググループ*があります。ゼロカーボンキャンパスを目指すべく専修大学自身のカーボンニュートラルの実行プランを策定するワーキンググループでは施設・設備の整備が重要なテーマとなるため、管理部にその運営を任せることとし、将来的に重要なテーマとなるゼロカーボンキャンパスを目指します。このように、適材適所の布陣で、全学体制でSDGs達成に向けて取り組んでいます。

*コアリションの「地域ゼロカーボンワーキンググループ」に対応するワーキンググループ／「人材育成ワーキンググループ」に対応するワーキンググループ／学内におけるSDGsの取り組み情報の整理やWebサイト管理を担当するワーキンググループ／ゼロカーボンキャンパスに向けた施策を検討するワーキンググループ

SDGs達成に向けた取り組みと、今後目指す方向性を教えてください。

今後は、17番目のSDGである「パートナーシップで目標を達成しよう」を実現するために、企業や行政、自治体、他大学・高校など、国内の各組織との連携や国外の組織との連携を展望しています。国内の各組織との連携では、現在、地方自治体や国などが運営する各種プラットフォームに積極的に参画しています。また、本学のスポーツ施設がある伊勢原市とは、スポーツ推進・健康増進に関する協定を締結しました。国外の組織との連携では、一例として本学の国際交流協定校であるラオス国立大学と川崎商工会議所とのプロジェクトが挙げられます。本学の会計学研究所の協力の下、ラオス語による複式簿記テキストを開発するなど、ラオスの中小企業への複式簿記の普及活動に取り組んでいます。また、コロナ禍で磨かれたオンライン技術を活

かし、本学の学生と国際交流協定校の学生とのオンラインによる交流も徐々に実現しています。例えば、現在は課外活動の一環ですが、オンラインでカルガリー大学の学生と交流事業を行い、日本とカナダのSDGsへの取り組みについて議論を交しました。また、人間科学部、石巻専修大学、ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学をオンラインで結んで行われた合同ゼミナールでもSDGsがテーマでした。このような取り組みは、SDGsが本学の多くの学生に浸透してきた証と考えると、大変嬉しく思います。

今後、力を入れたいのは、SDGsを担う次世代の人材育成です。2022年度から一部の学部で、転換・導入科目の「専修大学入門ゼミナール」においてSDGsの学習時間を試験的に設けます。また、「専修大学SDGsチャレンジプログラム」に高校生が参加できる仕組みも検討しています。

Society5.0に向けた人材育成について詳しく教えてください。

「Society 5.0」とは、情報社会(Society 4.0)に続く新たな社会を指すもので、AI・IoT・ロボット・ブロックチェーン等といった新たな技術があらゆる産業や社会生活に取り入れられ、それに関連するビッグデータを核に駆動されることにより、イノベーションから新たな価値が創造されて、経済発展と社会的課題の解決を両立していく近未来の質の高い人間中心の社会とされています。そして、そのビッグデータから新たな価値が創造される際に用いられる分析スキルが、データサイエンスです。データサイエンスの知識・スキルを身につけることは、今後のデジタル社会において、大学での学びを最大限活かすことにつながります。政府は、文理を問わず全ての大学・高専生(約50万人/年)が正規課程にて初級レベルの数理・データサイエンス・AIに関する知識を身につけることを目標に掲げており、本学も2022年度に「Si



データサイエンス教育プログラム」(対象は2022年度以降入学者)を立ち上げました。「Si」とは、Socio-Intelligence(社会知性)を表現したイニシャルです。まずは1年次で基礎的な知識を身につけてもらい、上級年次では、たとえば、ビッグデータを活用した顧客による商品の購入と併売行動の相関関係の分析、言葉遣いや方言のデータベースを作り特定の地域の傾向を導き出すなど、各学部・学科の専門領域で適用されているデータサイエンスを内容とする応用レベルの教育プログラム構築を予定しています。

これからの専修大学が手がけたいこと、目指す方向性とは？

まずは「Siデータサイエンス教育プログラム」を発展・充実させることです。2点目は「生田データサイエンスヒルズ」構想の推進です。生田キャンパスはデータサイエンスを扱う教員が多く、それらの教員が中心となり、産官学連携を想定したデータサイ

エンス研究の拠点づくりを進めています。2020年度にはデータサイエンス研究を後押しする「専修大学データサイエンス研究助成制度」も導入しました。一方、神田キャンパスのキーワードは「神田神保町カルチャータン」。神田神保町には世界に冠たる古書店街があり、語らうためのカフェをはじめ、学生向けの飲食店、大小の楽器店やスポーツ関連ショップが集積するなど、この地域は学生街として発展してきました。それに沿った学生街としての景観づくりに貢献したいですね。それから、「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリション」の活動と連動した専修大学のカーボンニュートラル関連の取り組みの推進。また、オンライン授業をキーとした国際交流協定校との連携もさらに強化したいところです。たとえば「Si国際ショナルアライアンス」と題して、専修大学から協定校へ科目をオンラインで提供し、逆に協定校の科目を発信してもらうといった、単位を相互交換するような大学間連携を築いていければと思っています。



持続可能な開発目標 SDGsとは

「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)」は、国連サミットで採択された2030年までの国際目標です。国連加盟193か国が協同的なパートナーシップの下、計画を実行することを確認し、「地球に生きる誰一人取り残さない」という誓いを基本としており、先進国に限らず開発途上国も取り組むユニバーサル(普遍的)な目標として位置づけられています。開発目標には「経済」、「社会」及び「環境」の3つの側面から、17の目標と、各目標に紐づく169のターゲットが設定され、人々の具体的な行動を促しています。



【専修大学 学長室企画課】

【神田キャンパス】〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8 【生田キャンパス】〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

Tel:044-911-1252 Fax:044-900-7803

<https://www.senshu-u.ac.jp/>